

B 123 山形県の服飾 —山形紅花商人の服飾—
山形県立米沢女短大 徳永幾久

目的 この度旧紅花商所蔵の江戸末期から明治にかけての紅花衣裳十数点が発見され、調査する機会を得た。このM家は元文二年近江国朮村より山形に來り、紅花、油、蠟燭などの商売を家業とし、百年前名字帯刀をゆるされた名家で、六、七、八代目の最も隆盛時代、文政六年から安政五年に着装された結婚衣裳、小袖、祝着がその調査資料である。

資料は出所、着装者が明確で保存状況もよく衣類発注先も明らかで、当時上方で流行となった藍と紅の曙染、新庄戸沢藩の貢納物、現在は幻の亀綾織となった亀綾江染の祝着なども含まれ、江戸末期の山形商人の衣生活並びに山形の服飾文化を解明する上で最も適切な資料である。紅花商人の服飾文化については未調査の部分が多いので、この資料により染織、着装文化意識と流通などを考察し、その実態を明らかにしたい。

方法 豪商M家の年譜、文書、服飾資料、近江商人、山形商人に関する文献などにより総合的に考察を試みた。

結果 1.山形の近江商人について、2.資料の着装期と考えられる江戸後期の服飾の特色

3.M家資料一覽とその考察 以上の結果により、これらの衣類は文政六年から106年間に三代が着装した衣服で、これらは一品毎に当時の商家の妻たちが着装した染織、模様構成などの特色をもろあわせており、これにより当時の紅花商人は、紅花、青苧などの商売を通じて、京阪、江戸、越後などの文化を取り入れ、服飾文化については豊かな高い意識と教養をもち、商家の生活文化を高めていたことが察知できたのである。